



**明治大学図書館
第13回書評コンテスト**

受賞作品集



2023年度





目 次

第13回書評コンテスト結果発表……………	3
講評（副館長 牧野淳司）……………	4
書評コンテスト受賞作品……………	7
受賞の言葉……………	19
第13回書評コンテスト募集要項……………	22
表彰式の写真・奥付……………	23



第 13 回 書評コンテスト 結果発表

明治大学図書館書評コンテスト選考部会による
厳正な選考の結果、下記の12作品の受賞が決定しました。

	所属・氏名	書評対象図書／著者名
最優秀賞	農学部 2年 藤原 絢人	青空娘/源氏鶏太 著
優秀賞	会計専門職研究科 1年 鈴木 智也	三体/劉慈欣 著
優秀賞	経営学部 2年 牧野 未央	モーリス/E.M.フォースター 著
特別賞 (紀伊國屋書店賞)	政治経済学部 4年 小沼 佳南子	アルジャーノンに花束を/ ダニエル・キイス 著
特別賞 (三省堂書店賞)	文学部 1年 小野 愛加	短歌と俳句の五十番勝負 /穂村弘、堀本祐樹 著
特別賞 (三省堂書店賞)	文学部 3年 平沢 祐月	虐殺のスイッチ：一人すら殺せない人が、 なぜ多くの人を殺せるのか？/森達也 著
特別賞 (丸善雄松堂賞)	理工学研究科 1年 石塚 悠斗	本当の戦争の話をしよう/Tim O'Brien 著
佳作	文学部 2年 稲葉 光哉	六人の嘘つきな大学生/浅倉秋成 著
佳作	法学部 4年 海老原 麻衣	砂漠/伊坂幸太郎 著
佳作	文学部 4年 関 真琴	推し、燃ゆ/宇佐見りん 著
佳作	農学部 1年 木村 幹太	坂の上の雲/司馬遼太郎 著
佳作	政治経済学部 2年 秋元 瑠名	滅びの笛/西村寿行 著

講 評

書評コンテスト選考部会員
明治大学図書館副館長 牧野 淳司
(文学部教授)

書評コンテスト選考部会委員を代表して、講評を述べます。そのまえに、まずは受賞者の皆さん、おめでとうございます。今回も力作が多く集まりました。それらの中でも、特に優れていたのが、今回受賞された方々の作品となります。どのような点が評価されたか、選考部会委員の方々から出た意見をいくつか紹介します。

今回の最優秀賞は、源氏鶏太の小説『青空娘』を評したものでした。高度経済成長時代の小説で、初版は1957年です。60年以上前に発表された小説ですが、現代の大学生の立場から読むと、コロナ終息への希望を与えてくれると評しました。コロナ禍を経験した現代の人々に、大切なものは何であるかを教えてくれる小説であるということです。これは読むしかありません。古い小説ですが、今こそ読んでみるべきと思われました。もちろん、それだけではありません。小説の内容が適切に紹介されていました。高度経済成長時代と現代とでは、時代背景や文化、社会の雰囲気が、かなり違います。そのような側面に注意を促しつつ、しかし実はこの作品が多面的な特徴を持っていること、それが現代を生きる我々にとって意味があることを、うまくまとめて伝えていました。小説を適切に紹介しつつ、今この小説を読む意味をうまく伝えた文章が高く評価されました。

優秀賞は2作品あります。一つは『三体』というSF小説を評したものです。どのような内容なのかよく伝わっておらず、もう少し丁寧な紹介がほしかったという意見もありましたが、何より熱意あふれる点が評価されました。この小説に対する思い入れが伝わってきて、読んでみたくなるということです。もちろん、思い入れだけでは、人を動かすことはできません。その点、本小説がSFでありながら、現代の最先端の諸問題に至る多角的視座を内包していることが述べられていました。具体的な紹介が少ない面はあるかもしれませんが、ユニークな小説であることが伝わってきました。書評対象に対する思い入れを前面に出すとかえって興ざめになってしまう危険もありますが、人に勧めたいという熱い思いは大事ですね。

もう1つの優秀賞はイギリスの小説『モーリス』を評したものです。1910年代に書かれたもので映画化もされた有名な作品です。余談ですが、昔大学生だったころ、この映画を見た記憶があります。詳細は覚えていないのですが、考えさせられるところが多いと感じたよ

うに記憶しています。小説の背景として、法律で同性愛が禁止されていた時代のものであることが説明されています。文章に稚拙なところがあるという指摘もありましたが、内容紹介と評のバランスがよいとの評価を得ました。それに加え、性的マイノリティーというタイムリーな問題を正面から取り上げている点も評価されました。よくぞこの本を選んだ、ということです。現代に通じる問題を取り上げる場合、こじつけ感やわざとらしさに注意が必要ですが、本作品は全体的に品よくまとめられていたと言えるでしょう。

以上が最優秀賞と優秀賞の3作品ですが、今回はいずれも小説を対象としたものでした。もちろん、小説を対象とすると賞がとりやすいというわけではありません。昨年までの受賞作をみると、小説以外も入賞しています。ただ、今回の場合は、対象に小説を選んだ書評が多かったことがあります。応募作品は29あったのですが、そのうち約3分の2が小説でした。この割合は昨年までと比べても高いです。なぜ小説が多くなったのか、理由は分かりませんが、現在の諸問題に焦点を当てた評論や概説書は、数年経過すると古いところが出てしまうことがあるかもしれません。それに比べ、小説は時代を越えて読める場合があると言うことはできるでしょう。そのような価値のある小説を発見して、皆に発信することは、とても素晴らしいことだと思います。書物は読まれないと忘れられていきます。その中で、読み直してみるべき価値がある書物を見つけて、まわりに伝えていくことはとても意義のあることだと思います。今回、小説を選んだ書評が多かったことは、時代をこえて書物をよみがえらせる試みが多かったということです。書物を大事にする応募者が大勢いたことを嬉しく思います。

一方、今話題となっている本や、現代社会が直面する諸問題を扱った本が少なかったことは、少し気がかりです。われわれは積極的に社会に目を向けなければならないのに、そうしていないのではないかと疑われるからです。ですが、それは表面的な見方でしょう。今回の応募作品を見ると、古い小説を取り上げつつも、それを現代の諸問題と結び付けているものが多かったからです。おそらく、書評対象としなかつただけで、ふだんから幅広い読書をしているのだと思います。そして、そのような人こそ、小説についても、よい書評を書くことができるでしょう。

特別賞と佳作作品については、一つ一つコメントすることは控えますが、選考部会委員から出た全体講評をいくつか紹介します。

最初に厳しい意見ですが、推敲を十分に重ねていない作品が多かったとありました。1000字前後の文章はトレーニングにもなるので、是非鍛錬してほしいということです。逆に標準以上の文章力を持つ作品が多かったとの意見もあります。評価基準や期待度は人によって違いますが、今回の応募作品について、明治大学の学生のレベルはどうかと問われると、比較材料を私は持ち合わせていないので、客観的な評価は難しいです。話は飛躍しますが、最近はAIが話題で、レポートはおろか、小説も書くことができます。これから先の時代、文章というものがどうなっていくのか、その中でどのような言葉が人を動かすのか、私もよく分かっていませんが、考え続けたいものです。

書評対象とする本については、これは、いつも言えることではありますが、何を選ぶかが非常に重要との意見がありました。今回はSFや異世界モノ、哲学書を選んだ応募者が多かったが、未読の読者に面白さを伝えようとするとき、その世界観や論理を説明するのに多くの紙幅が必要となり、それを面白く要約したり、的確に内容を伝えたりするためには、かなりの力量を要するので注意が必要というアドバイスがありました。

一方、本の内容ばかりでなく、書き手の体験や個性が問われるとの意見もありました。自分にしか書けない書評こそが「読ませる書評」であり、自身の「今」や「大学生」という状況に、どれだけ深い洞察を加えているかが勝負となる、ということです。

他にもいくつか講評がありましたが、重複するところもありますから、省略します。

ところで、本を読まない学生が多くなったと言われる中で、多くの応募があったことを喜ぶ意見がありました。本当に学生が本を読まなくなっているのかどうか、最近の調査結果があるわけではないですが、私が最近気になっていることの一つは電子書籍です。電子書籍も含めれば読書は増えているかもしれません。ですが、紙の本が読まれなくなるとしたら、それは少し心配です。何かが失われる気がするからです。電子書籍がよくないとは思いませんし、逆に紙の本にしかないものを説明せよと言われると、簡単ではありません。ただ、紙は安心するところがあります。時代を越えて伝えることができます。電子情報は、ある日、宇宙から謎の電磁波が飛んできて、すべて消えてしまうかも知れません。今のところ、人類の歴史の中でもっとも長い寿命を持つメディアとして実績があるのが紙なので（大事に扱えば奈良時代の写本のように1000年以上残ります）、安心するのもかもしれません。紙の本がなくなると、過去とのつながりが失われる危険が大きくなると思います。我々は何を大事にしていくべきかという問題です。

電子書籍と紙の本については、授業で学生にどちらを読むか、尋ねたことがあります。漫画やちょっと読みたいだけの本はスマホなどで、ちゃんとした本は紙で読むという学生がけっこう多かったです。（「ちゃんとした」の内実が問題ですが。）そのような中、今回の書評コンテストの応募作品のほとんどは紙の本を書評対象にしていたと思いますが、審査をして感じたことは、埋もれていた本を、時代を越えてよみがえらせることの素晴らしさです。この点で、応募した学生には感謝しています。そして、紙の本を書評することは、しばらく続けてみる価値があると思いました。

最後は話題が大きく逸れてしまいましたが、以上で講評を終えます。

最優秀賞

『青空娘』 源氏鶏太著

農学部 食料環境政策学科 2年

藤原 絢人

青空を見ることの素晴らしさをこの小説は教えてくれる。私が本作に出会ったのは3年前、新型コロナウイルスで自粛生活を強いられていた時だ。授業を受けるのも友達と話すのも自分の部屋の中。まるで青空なんてない場所で読んだ本作の、題名通り明朗で透き通った内容は鬱屈とした日々には希望をもたらした。

この作品は田舎から上京した女学生・有子が過酷な状況に置かれながらも周囲の人との関わりを通して成長していく様を描く。携帯電話がない時代だからこそ生まれる人々の関係も見どころだ。

本作の良さは青空の描き方にあると思う。有子は嬉しい時や悲しい時など事ある毎に丘に上って青空に問いかける。随所随所に登場するこの青空が主人公の純粋さや健気さを際立たせている。

『青空娘』が最初に刊行されたのは1957年であり、高度経済成長期真っ只中のときだ。戦後復興を終え、いよいよ日本が変わっていくという頃に書かれた話である。街は目まぐるしい発展を遂げ、人々は忙しく毎日を生きている。そんな時代背景を鑑みると作中の青空は新時代への期待を表しているともとれる。そして、60年以上たった現在に読むとそれはコロナ終息への希望に見える。青空はいつの時代も暗い世の中を救う道標のようなものなのだ。

また、本作は新しい女性像を描いた小説としても秀逸である。当時の小説であれば、女性は虐げられ男性の言いなりになるという展開も多かった。しかし、本作の主人公は涙を見せずあくまでも澁刺と描写されている。それまでサラリーマン小説を多く発表していた源氏鶏太にとっても転換期的な作品にあたるだろう。「青空娘」とは単なるフィクションの主人公なのではなく、新たな時代を生きる等身大の女性そのものなのだと私は感じる。決して下を向かない女性像というのは、男女平等が謳われるこの現代にも新鮮に映る。

コロナ禍で人々が俯きがちになってしまった現代。女性の地位が未だに低い現代。私は半世紀以上前に書かれたこの物語を今でこそ読むべきだと考える。青空を見ること。そんな単純なことがより良い時代へ向かうために必要なのかもしれない。

優秀賞

『三体』 劉慈欣著、大森望、光吉さくら、ワン・チャイ訳

専門職大学院 会計専門職研究科 1年

鈴木 智也

『三体』は、天体力学の三体問題に由来しており、古典SFの影響を色濃く受けた王道SF作品である。ホーガンの『星を継ぐもの』や、田中芳樹の『銀河英雄伝説』などをベースとしつつ、更に発展させて古典的な美しさと現代的な緻密さを併せ持つ作品を作り上げたことを鑑みれば、本作はこれまでのSF作品の集大成だと言っても過言ではない。そして、『三体』は、王道SFでありながらも、サスペンスであり、歴史書であり、哲学書でもある。

本作は、ナノマテリアル開発者である汪淼（ワン・ミャオ）が、科学者が次々に自殺するという奇妙な事件に巻き込まれていく現代編、そして、天体物理学者の葉文潔（イエ・ウェンジェ）の壮絶な経験を追っていく過去編を2本の軸にして進行する。SFらしい重厚さと、謎が次々と明らかになるサスペンス要素に加えて、文明の歩みを追体験できる歴史書の一面（詳しくは本編において登場する、VRゲーム「三体」を参照して欲しい。）を持つ本作だが、その根底には、究極の哲学的問題が横たわっている。

貴方は、人類はどこから来てどこへ行くのか、宇宙はどこから生まれてどこへ向かうのかという問題について考えを巡らせたことはあるだろうか。『三体』シリーズは、この哲学的問題を、SFというジャンルを通じて読者に投げかけ続ける。この問いかけは、私たちの生活には何ら関係のないものだと思うかもしれない。しかし、この問いの答えを探し続けることこそが、社会を彷徨い続ける我々の道標になるような気がしてならない。自らを俯瞰し、各々の哲学を深めることができれば、身の回りで生じる問題が極めてシンプルなものだということが分かるだろう。

想像をはるかに超えるスケールでの話の展開、また、中国における文化大革命当時の描写に、読みにくさを感じることも多々あるだろう。現代科学の領域を超えたアイデアも多く、著者自身も多少誇張していることを認めている。しかし、このスケール感は、著者によって緻密に計算されたものである。王道なストーリーの裏には、複雑な、それでいて美しい構成が存在している。本作のラストにおいて、史強（シー・チアン）が汪淼らにかけ言葉によって物語は完成する。是非、最後まで読み進めて確かめて欲しい。

3部作の一作目に当たる本作は、シリーズにおける終わりの始まりを描いた作品となっている。『三体』3部作は全作翻訳・出版されているため、本作を読み終えた方はすぐに続きを読むことができる。本シリーズを通じて、圧倒的スケール感が贈る読書の旅に出かけてみてはいかがだろうか。そして、人類の未来に思いを馳せると共に、貴方自身の哲学を深めるきっかけとなれば、評者としても幸いである。

優秀賞

『モーリス』 E.M.フォースター著、加賀山卓朗訳

経営学部 公共経営学科 2年

牧野 未央

暗闇の中で発した声は、誰かの希望になる。光となり、この世界を変える大きな力となっていく。

『モーリス』は、イギリスで同性愛が法律によって禁止されていた時期に執筆された。タブー視されていたテーマを描き切ったというだけでなくそれは悲劇的な結末を迎えなかったため、著者の死後刊行されることとなった作品だ。主人公であるモーリスは、ケンブリッジ大学でクライヴという青年に出会い互いに愛し合うようになるが、やがてクライヴが「ふつうになった」ため、その関係は唐突に終わりを迎える。自分も「ふつう」になりたい、そうしたら楽になれるともがき苦しみながら自己に向き合っていくうちに、その輪郭に怯えることや苛立つこともありながらモーリスは最後にある大きな決断をする。そこには葛藤や苦痛だけでなく、自分が愛する人を愛すること、嘘のないありのままの自分であることの喜びがある。そして同時に、「ふつう」とされている人々とそうではないと社会に見なされてしまった人々の分断も描かれているのである。

特に象徴的なのはラストだろう。モーリスは、前述した通り彼がした大きな決断を伝えるためにクライヴの元を訪れる。夜の闇の中でモーリスの姿はクライヴには見えず、ただ声だけが聞こえる。このときのクライヴは、「自分の周りに性的マイノリティはいない」となぜか自信たっぷりに言っている現実世界の「ふつう」の人々の姿を想起させる。いるのだ。間違いなく。性的マイノリティはあなたの周りに必ずいる。いないことにされ続けていただけであって、モーリスは、モーリスたちはそこにいる。見えないことは、いないことと同義ではない。さらにクライヴは、自身のセクシュアリティを受け入れたことを話すモーリスを「怪物」と形容する。これも、リアルな世界の「ふつう」な人々がしばしば向けるクィアな人々への偏見に重なるようだ。しかし、実際に作中でクライヴの視線によって描写されるのはその「怪物」の醜い姿ではない。そこにあるのは闇に輝く待宵草の花びらと、「生身の人間」であるモーリスによって紡がれた誇り高く美しい言葉たちだ。

この光景は、性的マイノリティと SNS を取り巻く問題についてリンクするようでもある。声を上げないといないことにされる。しかし発信することによってターゲットにされ、おぞましいヘイトを投げつけられる。それでも、先の見えない暗闇の中で発したその声は、待宵草の花のように暗闇の中の光となる。それが『モーリス』の読者である私にとっての希望となったように、この世界で誰かが灯した明かりは、また違う誰かの希望になり得る。執筆、そして出版から何十年経っても読み継がれる作品であるのは、問題の本質を的確に捉え、苦しむ人々を照らし続けているからだ。だからこそ、憎悪や暴力、差別が根強く残るこの世界の今を生きる私たちにも、この物語が必要なのである。

特別賞 紀伊國屋書店賞

『アルジャーノンに花束を』ダニエル・キイス著、小尾美佐訳著

政治経済学部 政治学科 4年

小沼 佳南子

知的障害があり、幼児程度の知能しかもたなかった主人公チャーリーは、かしこくなってみんなと同じようになりたいと願っていた。そんな彼のもとに知能指数を高める手術の話が舞い込む。本作品は、彼がその手術を受けて天才へと変貌していく過程と心の揺れ動きを描く。天才になることで彼は幸せになったのだろうか、生命倫理問題を孕む近未来的題材でありながらも、「人生とは」「愛するとは」という人間としての不変的命題を私たちに訴えかける教訓的小説だ。

この作品の特筆すべき点は以下の2点である。

1点目は、文章と構成の独自性である。本作品は、主人公チャーリーの視点による独白形式で文章が綴られており、物語が進むにつれ、文体そのものが変化していく。そのため、チャーリーの知能が幼児程度しかない冒頭は文字を追うのが嫌になるほど読みづらい。文字を覚えてたての幼稚園児が書いた日記を彷彿とさせるような、ひらがなのみ、誤字脱字のオンパレードである。けれども同時に、難解な学術論文を読まされる学生の気持ちをも味わうことになるだろう。使われる語彙や文体によって知能の高さ、成長度を表現する著者の技術に感嘆するとともに、その表現の持ち味を失わせることなく日本語へ訳し上げた訳者の手腕は実に見事である。

2点目は、「差別」という社会上の重大なテーマへの問題提起性だ。チャーリーは知能が上昇するにつれて、彼は今まで受けてきた自分の境遇を理解することとなる。それは差別されてきた過去であり、哀れみと侮蔑が入り混じった感情であった。彼自身がその差別に気づいていく様を描くことにより、「差別」を主観・感情的かつ社会構造的という二側面から私たちに知らしめ、考えさせる内容となっている。

最後に、本作品は誰もが共感できる力を有しているといえよう。なぜなら、チャーリーのたった数ヶ月間の半生を通じて「人生」そのものを表現しているからだ。チャーリーが天才へとようになっていく様子はまさに大人への「成長」過程であり、その後彼を待ち受けていたのは人生でいえば「老い」である。同時に、天才となった彼が手にしたのは、人間なら誰しもが経験しうる「孤独」であった。いかにして彼は誰にも理解されない孤独と今までできたことができなくなっていく苦しみ、葛藤を受容し、乗り越えていくのか。

“アルジャーノンに花束を”この題名の意味を理解したとき、私たちはチャーリーの心の気高さとその愛を目の当たりにするだろう。

特別賞 三省堂書店賞

『短歌と俳句の五十番勝負』穂村弘、堀本祐樹著

文学部 文学科 1年

小野 愛加

剣で斬り合う忍者の姿が、小さいながらも目を引く表紙。加えて巻末にあるイベントの記録では、著者の二人がそれぞれ鎖鎌を持ち、「忍者姿で闘いのポーズ」と書かれた写真もある。こう見ると忍者どうしの戦闘ものを思い浮かべるかもしれないが、実は著者の二人は俳句と短歌という異なる創作物で戦っているのだ。

本作は俳人の堀本裕樹氏と歌人の穂村弘氏が、作家やタレント、牧師や小学生にいたるまでの様々な背景を持つ五十人から寄せられたお題を用い、それぞれ俳句と短歌に仕上げた作品がまとめられている。見開きの右ページに短歌、左ページに俳句が配置され、さながら対立しているかのような構図が良い。また各作品に短いエッセイも掲載されており、著者のお題に対する思いや作品の背景を辿ることができる。

俳句と短歌の対決が特徴的な本作だが、私はここに表現形式の垣根を越えた、表現者としての発想を見ることができると考える。例えばお題「楕円」では、堀本裕樹氏は胡瓜漬の切り口を連想し句にした。しかし穂村弘氏は様々な楕円のことを思い浮かべた上で、最終的に惑星の軌道としての「楕円」を用いている。同じお題を与えられたのにも関わらず、食べ物と宇宙という全く異なるモチーフに発展したのはとても興味深い。反対に、似た経験がもとになっているにも関わらず、作品になると異なる風景描写に発展した場合もある。お題「カルピス」では、両者ともエッセイに子どもの頃の夏の思い出を回想している。だが短歌ではセミを詰め込んだ虫籠が、俳句では夕立の描写に焦点が当てられていた。同じモチーフであっても、似た作品ができることはないのかもしれない。創作の技術が巧みであることはもちろんだが、本書ではお題からの連想、発展の仕方を比較できることに面白さがある。お題を目にしたとき、それぞれが何を思うのか。短歌と俳句の垣根を越えた、一人の表現者の感性を本書は伝えてくれるのだ。

ここまで俳句と短歌を中心に語ってきたが、そもそもあなたはこの二つの違いをご存じだろうか。私は趣味で短歌を詠んだりするのだが、そのことを人に話すと「五・七・五のやつ」や「季語入れるやつ」と俳句の特徴を言われることが少なくない。中には「難しそう」の一点張りで興味を持ってもらえないこともある。ぜひこの書籍を読んで、俳句と短歌、それぞれの面白さを感じてほしい。そしてそこに共通する、表現者の発想をその目でじっくりと捉えてほしい。

特別賞 三省堂書店賞

『虐殺のスイッチ：一人すら殺せない人が、なぜ多くの人を殺せるのか？』

森達也著

文学部 史学地理学科 3年

平沢 祐月

史学科で歴史を学んでいると様々な虐殺事件を学ぶことになる。南京大虐殺、ホロコースト、クメールルージュによる大量虐殺、、、。虐殺は「異常」なことで、「自分とは関係ないもの」としてとらえがちである。しかし、本当にそうなのだろうか。そうだとしたら、なぜこんなに虐殺が繰り返されるのだろうか。

この本ではなぜ虐殺が起こるのかを根本から考え、私たちに提示し、そして虐殺を他人事として捉えがちな私たちに警告している。著者の森達也氏はドキュメンタリー作品を多く製作しているディレクターでオウム真理教に関するドキュメンタリー映画を作成、その過程でオウム真理教の信者たちが、「善良で優しくて純粋な人たち」で、決して世間の人々がイメージするような「異常」で「悪魔」のような人たちではないことに驚いたという。考えてみると南京大虐殺も、ホロコーストも大規模な虐殺は一人、あるいは数人の「異常」な人たちだけでできる量の殺しではない。たくさんの人を殺すにはそれだけたくさんの人が人を殺さなければならない。そのたくさんの中は「普通」の人なのであると森氏は指摘する。「普通」の人が人を殺すなら、私たちが他人事ではない。私たちが何かの状況がそろえば、人を殺すことができるということなのである。しかも大量に。

森氏によれば虐殺が起こる過程にはいくつかの原因がある。その中の大きなキーワードは「集団化」。戦争や虐殺に加担するとき、私たちは個を失い、全体の一部になる。思考が停止する。そして虐殺の相手も個ではなく全体の一部になり、加害者から見たとき彼らは人間でなくなるのである。人間でないものにだったら何をしてもいいのだから。

そして私たち日本人は周りを気にする傾向がある。そのため、組織になじみやすい。集団化が得意な傾向がある。太平洋戦争ではその傾向が悪い方向へと進んでいった。森氏は「組織の一部になりやすい日本人は、組織の一部になることの危険性とリスクが身に染みていない。(中略)しっかりと振り返って自分たちの過ちを認めていない。都合の悪い歴史から目を逸らしている。断言しよう。ならば僕たちは、同じことを繰り返す。」と警告している。虐殺は遠いものとして捉えがちだが、身近な差別やいじめと共通する部分も多い。虐殺が自分とかけ離れすぎていると感じる人はそのような目線で読んでみるのも良いだろう。

世界で戦争が起き、軍事費を上げようとしている政府が日本にある今こそ、この本を読み、差別や虐殺、戦争について自分事として考える必要があるだろう。

特別賞 丸善雄松堂賞

『本当の戦争の話をしよう』ティム・オブライエン著、村上春樹訳

大学院 理工学研究科 博士前期課程 1年

石塚 悠斗

——本当の戦争の話というのは全然教訓的ではない。
それは人間の徳性を良い方向に導かないし、高めもしない。
またひとがそれまでやってきた行いをやめさせたりするようなこともない。

不思議な本である。戦争と平和を説く場面はない。戦争のむごさを意識の流れから描く仕掛けもない。当然、戦争犯罪人の裁判から現代社会の病理を分析する試みもない。収められているのは22の物語。ただ、それだけ。

舞台は1970年代、ベトナム戦争。著者による取材の形式、もしくは従軍した著者自身の回想として、ベトナム戦争にまつわる特徴的なエピソードが淡々と語られる。例えば、前線基地に呼び出されたガールフレンドが本当の自分を見つける「ソン・チャボンの恋人」。例えば、復員した男が夕暮れ時に湖畔をドライブする「勇敢であること」。例えば、徴兵事務所に出頭する直前の一週間で「わたし」に起きたささやかな、しかし決定的な出来事「レイニー河にて」。

幻想的ともとれる内容だ。本書はここに村上春樹の訳が組み合わさり、きわめて独特な雰囲気を出している。軽妙でスタイリッシュな語りと、唐突に降りかかる災難を通して、読者は奇妙な光景を追体験する。短くまとまった各章のほとんどが独立しており、なんなら時系列やオブライエンによる発表年にも沿っていない。そうした断片的な語りであるがゆえにかえって、いや、むしろ必然的にわたしたちは「物語」を読むことになる。本文中で繰り返される“これは創作であり、”がゆっくりとわたしたちの現実をあいまいに溶かしていく。

2023年を生きるわたしたちにとって、戦争は、手を伸ばせば届く距離にある存在となった。長期化するロシアとウクライナの対立。無尽蔵の火薬庫と化すエルサレム。とめどない情報が焚きつける、憎しみと報復の連鎖。

戦争のむごさと戦争の正しさが同時に語られてしまういまこの時代に、わたしたちは一度立ち止まり向き合ってもいいだろう。半世紀前、戦地ベトナムへ赴いた若者たちの言葉に。彼らが抱いた困惑に。

誰かが言う。戦争なんてものはまともに語れやしない。著者は優しくこう返すに違いない。語りえぬものをこそ、物語らねばならない、と。

佳 作

『六人の嘘つきな大学生』 浅倉秋成著

文学部 文学科 2年

稲葉 光哉

人間には様々な顔がある。これは言うまでもなく比喻であり、そして自明の理として扱われているが、我々はそれを忘れて他人のある一面をその人間の全てであると思い込んでしまう時がある。SNS が広く普及した現代に於ける「炎上」という現象はその顕著な例だ。本書は、読者をカタルシスに導くヒューマンミステリーであると同時に、そのような一元的な他者理解に対し警鐘を鳴らす啓蒙書である。

舞台は気鋭の企業スピラリンクスの最終集団面接。1カ月をかけて最高のチームを作り上げるというノルマを課され、親交を深めていた6人の就活生は、直前に最終選考の内容が「6人の中から内定者を1人選ぶ」ことに変更され、戸惑いを見せたものの健闘を誓い合い会場に臨む。フェアな話し合いを進めていた6人だったが、ある時部屋の隅に一つの便箋が置かれていたことに気付く。

結果から言えばその中には六人それぞれの「黒歴史」と言うべき過去を記録した紙が入っており、これから6人は最も内定に相応しい人間を選ぶどころではなくなってしまうのだが、これは彼らが判断材料が圧倒的に不足していた中で「最も内定に相応しい人間を選」ぼうとしたのかを示し、筆者は一見良く見える人間にも裏の顔があるという事例を通して読者に多面的な他者理解を求めている。しかし、彼らの物語が「人間の本性は所詮このようなものだ」といったペシミスティックでありきたりな結論で片づけられることなく、丁寧に締めくくられるのが本作の大きな魅力である。

本作は最終選考を描く『Employment examination－就職試験－』とその後日談を描く『And then－それから－』に分かれている。『就職試験』で散りばめられた伏線が『それから』で回収される、という構成だ。あるいは『就職試験』のネタバラシが『それから』であると言ってもいい。『それから』では6人それぞれの黒歴史の真相が明らかになる。最終選考の場で野球部の後輩を虐めて自殺に追い込んだとリークされた袴田亮は1年生を虐めていた2年生を叱っただけであり、オーナー商法で高齢者を騙すセミナーに加担していたと暴露された森久保公彦は、友人に勧められ、そうとは知らず参加しただけだった。また久賀蒼大が健常者にもかかわらず車いすマークの駐車場に車を停めたのは同乗者である鳥衣織が身体障害者だったということが大分後になって明かされている。筆者はここで、今度は先程とは全く逆のアプローチで読者一人ひとりに問うているのだ。その目から見える一面だけで他人の性格、人間像、ひいては善か悪かどうかさえも決めてしまってもいいませんか、と。この二重の仕掛けにより本作は読者の心を掴みながらも、彼らに対し内省を促すことに成功している。作者である浅倉秋成氏が「伏線の狙撃手」と称されるのはその伏線の張り方の巧さによってではなく、伏線の回収という行為自体にエンタメ以上の意味を持たせる、その人智を超えた力量によってなのである。

佳作

『砂漠』 伊坂幸太郎著

法学部 法律学科 4年

海老原 麻衣

砂漠に雪を降らせることができるだろうか。近年はサハラ砂漠でも積雪が観測されるようだが、人間が意図的に雪を降らせることは難しい。それでも行動すれば、困難な状況の何かが変わるかもしれない。そのことを本書の登場人物たちは教えてくれる。

本書は、何事にも冷めた態度で俯瞰的に物事を眺める主人公・北村の視点から、個性豊かな仲間たちと過ごす大学時代の春夏秋冬を描いている。どこまでもまっすぐな西島、超能力者の南、美人でクールな東堂、人の中心にいる鳥井といった特徴的な5人組とともに、読者は大学生の四季を渡り歩いていく。

単に大学時代といっても、その内容は刺激的だ。ボウリングに麻雀といった娯楽から犯罪者との対決といったスリリングな展開もある。一見とんでもない大学生活に見えるが、本質は我々の学生生活と何ら変わらない。くだらないことで笑って、時に傷つきながら他者へと向き合う。落ち込む友人をどうにか励まそうと奔走する。多くの出会いや事件を通して、読者も身に覚えのある心の弱さや青春のきらめきを見事に描き出している。

本書の魅力は大きく分けて二つある。一つ目は、読者を夢中にさせる工夫が随所に現れることだ。作中に登場する話題や小道具は、春から冬にかけて絶妙なタイミングで再登場する。鮮やかな伏線回収は、読後に驚きと爽快感を与えてくれる。

二つ目は、いつの時代にも通じる社会への向き合い方を示したことだ。作中、イラク戦争が勃発した状況を踏まえて「今、目の前で泣いている人を救えない人間がね、明日、世界を救えるわけがないんですよ」と西島は説く。この言葉通り、西島は殺処分寸前の犬を引き取り、心を閉ざした友人に寄り添おうとする。ウクライナ情勢が長引き、イスラエルで大規模な紛争が起きている今、遠く異国の地にいる自分に何ができるのかと途方に暮れることがある。そんなときに、西島の乱暴なまでにまっすぐな生き方は、読者の心にそれでも何かできることがあるのだと強く訴えかける。

きっと、平和のために私たちができることは、案外身近に存在する。世間に関心を持ち続けることも、鬱屈とした苦悩を抱える者に手を差し伸べることもできるだろう。そうすれば、巡り巡って砂漠に雪を降らせることもできるのだ。

佳作

『推し、燃ゆ』宇佐見りん著

文学部 史学地理学科 4年 関 真琴

人間は、何かを守ることで生きていくことができる。私がこの言葉を理解できたのは、この本を読んだ後だったように思う。

近頃「推し」という言葉をよく耳にするようになった。インターネット辞典で検索してみれば、その定義は「人に勧めること、また、人に勧めたいほど気に入っているもの」とされていた。「推し」という言葉からさらに、「推し活」「〇〇推し」が出現し、「推し」についての研究報告がなされ、さらには「推し」がしテーマになったアニメ作品が社会現象になっている。現代社会に突如現れた、「推し」は今や私たちの日常を席卷しつつある。

本書「推し、燃ゆ」は宇佐見りんによって2020年に発表された。宇佐見氏にとって本作は2作目であり、この作品によって21歳にして芥川賞作家となった。センセーショナルなタイトルと、「推し」というタイムリーなテーマが瞬く間に話題となり、国内だけではなく海外でも多数の語に翻訳されるなど、話題を集めた。タイトルの「推し」とは、主人公の女子高生あかりが崇拜する、真幸という男性アイドルを指す。「燃ゆ」とは、これまた現代的な表現であるが、SNS上での騒動、いわゆる炎上を表現している。物語は、真幸が自身のファンに暴行を加えたことにより炎上したところから始まる。真幸を生きるための「背骨」とまで表現していたあかりは、この一件で自分自身の生き方を変化させることとなる。

ここまで聞くと、「推し」という現代文化に染まった、若者の行く末、というようなストーリーと解釈されるかもしれない。しかし、この話はそんな短絡的なところに落ち着くどころか、人間の生きる本質を痛いほどに教えてくれる。

<「仕方ないよ」姉はぼつりと言った。「あかりは何も、できないんだから」>

真幸の経歴を暗記し、彼のためのブログを書き、彼の舞台の原作書を予習と言って読むあかり。その姿は言葉通り、人間らしく生き生きとしたものであった。しかし、彼の存在がいないところで、あかりは自分をコントロールすることができない。生活することができない。真幸という存在のためにしか生きることができないあかりの姿は、人間の生きる本質を極限まで誇張したもののように見える。家族、友人、社会的な立場、権威、富、自分自身。何かを守るために人は生きている。何かに対する能動的な気持ちがあつてこそ、私達は行動することができる。それが失われた世界では、私達は「背骨」を失い、社会という地面に立っていることができなくなるだろう。あかりの姿はそれをありありとわからせてくれる。

自分を直立させてくれる存在はどこにあるのか、自分を自分たらしめるものは何なのか。私にとって守るべき背骨は何なのかを、逃げずに考えさせてくれる作品であった。

佳作

『坂の上の雲』 司馬遼太郎著

農学部 食料環境政策学科 1年 木村 幹太

「まことに小さな国が、開化期を迎えようとしている」

何度も読んだ筈のこの本の最初のページをめくる時、私の頭にはそんな渡辺謙のナレーションが響くのだ。旧時代の支配者であった武士が鬘を落とし洋服に身を包む。新時代の若者たちは立身出世を夢見て国家という巨大機関の歯車となる。封建社会を破壊し、西洋列強の用意した『近代』という舞台の上で戦わなければならない当時の人々が大いに苦しみ、そしてたった一步の成長にさえも歓喜したその心情を痛いほど理解できた。

私が父の書齋の埃を被った本棚から『坂の上の雲』を初めて見つけてからもう五年が経つ。当時私は中学生だった。それは値札が貼られたままの、カバーの端がみっともなく破れた本だったが、気が付けば私は夢中になって文字を目で追っていたのである。そして、歳をとるごとに、読み返すごとに登場人物達の思考や行動、織りなされる人間ドラマに対する私の評価や考え方が変化するのだ。そして、これからも変化していくのだろう。

この物語を読む際にまず理解しなければならないことは、当然であるがこれは歴史を題材にした小説であり歴史書ではないということだ。著者は小説家であって歴史学者ではない。所謂『司馬史観』と呼ばれる著者の思想を基にした記述には以前から批判も多い。この著作において顕著なのはやはり乃木希典の扱いだらう。彼は旅順攻略において無能と著者から激的な批判を受けた。

しかしながら、何故この小説が五十年もの月日を越え多くの人々に愛され、そして時に記述が全て史実に拠るものだと勘違いする人が出るのか。それはひとえに、描写があまりにもリアリティに満ち史実だと思わせる程の説得力をもっているからだらう。

この小説は、伊予松山に生まれた秋山好古、秋山真之、そして正岡子規の三人が主人公である。明治という激動の新時代を生きた彼らがいかにして日本の歴史に名を残すに至るのかということが描かれている。特筆すべきは、三人全てが慣習に囚われず新しいものを創造したということだ。好古は日本騎兵、真之は海軍戦術、子規は文芸改革の道を拓いた。その半ばで最も大きな事件と言えれば日露戦争であろう。白人の大国に如何にしてアジアの新興国が立ち向かったのか。物語では前後関係も含めてその経緯を描写している。

何故、こんなにも有名な小説を今更私が紹介したのか。それは、現在の日本に漂うどうしようもない閉塞感を打破するためのきっかけになるのではないかと思ったからだ。三十年間伸びない GDP、人口減少と少子高齢化、年金問題といった重い課題は将来を担う世代である我々の心に重くのしかかっている。こんな時代だからこそ、我々は三人の主人公達のように古いものに固執せず常に先を見据え新たなものを打ち立てる志を持つべきではないのだろうか。もし一朵の白い雲が輝いていればそれのみを目指して坂を上る、そんな心意気が必要な気がしてならないのだ。

佳 作

『滅びの笛』西村寿行著

政治経済学部 政治学科 2年

秋元 瑠名

「君たちも、想像力に、欠けとるな……」この物語に登場する右川博士の言葉だ。後先を考えない開発をした人類は、今日自ら引き起こした様々な問題に喘いでいる。人間と動物の関係もそうだ。山から下りてきた野生動物は人間に被害をもたらすが、その原因を作ったのは紛れもない人間自身だ。人間と動物というように、人間は動物と一線を画した存在だと捉えられているが、人間も動物の一種にすぎない。自然の狂気は人間という、ただの動物が抑えられるものではなく、人間が壊した自然は歪みとなって蓄積され、いつか爆発する。これを表しているのが本書だ。

ある日鳥獣の大移動が始まった。それに疑問を持った沖田はクマザサの一斉開花により、おびただしい数の鼠が発生し、甚大な被害を人間に与えることを知る。彼は行政に狩猟の禁止を求めるが、受け入れられない。やがて一国を壊滅しかねない大災害が起きる。

西村寿行はハードロマンの小説家として知られているが、パニック小説も数多く執筆している。『滅びの笛』の続編である『滅びの宴』や、蝗害を題材とした『蒼茫の大地、滅ぶ』などがあり、いずれの作品も人間そして国家への憎悪が垣間見える。

目先の利益に気を取られ、先々を考えずに開発を続けた結果、地球温暖化や異常気象という歪みが生じてきた現代も同じような状況にある。想像力の欠如により、自然現象だけでなく、人間同士でも争い続け、多くの人間が苦しみ、被害を受けているのが現状だ。西村が訴える人間の愚鈍さ、醜さを無視し続け、それがどれほどの影響を自分たちに与えるかも知らずに、人間は進歩し続けてきた。そのツケは確実に禍根を残している。国家だけでなく、個々人でもその傾向はある。簡単に情報が手に入る昨今では考えることをやめ、すぐ目下の情報に飛びついてしまう。多くのフェイクニュースを真実だとして受け止め、世の中にはウソが蔓延っている。テクノロジーの進化は人間の想像力を弱らせ、その浅はかさを存分に知らしめた。今がただ良ければよい、何とかなるだろう、と問題の先送りをすることは危うく、後に災厄をもたらされるだろう。考えることをやめず、その後どんな影響を与えるかを検討した上で行動に移すべきだ、ということはこの本は教えてくれる。



受賞の言葉

最優秀賞

農学部 食料環境政策学科2年 藤原 絢人

今回は60年以上前の作品を選びました。この頃の作品というのは時とともに忘れ去られていきます。しかし、あえてこの時代に目を向けてみることで現代人が忘れていた感覚や気付きを得られると思っています。まだまだ埋もれている作品はあるので、みなさんも是非お気に入りの一冊を掘り出してみてください。

優秀賞

専門職大学院 会計専門職研究科1年 鈴木 智也

本を読むということは、リレーのバトンを繋ぐようなものだと考えています。

先人たちが築いたものを受け継ぎ、そして、次の世代に引き継ぐこと。

これこそが読書の意義であり、そして生きることそのものの意味なように感じます。私自身としても、読書を通じて次の世代に何か一つでも残していくことができれば、非常に嬉しく思います。

優秀賞

経営学部 公共経営学科2年 牧野 未央

私の言葉はときに無力ですが、無意味ではないことを知っています。すべての性的マイノリティが安心して過ごせる一日まではまだ遠いけれど、いつか必ずたどり着けると信じて、今はみなさんと一緒にひとつずつ明かりを灯していけたらと思います。

特別賞（紀伊國屋書店賞）

政治経済学部 政治学科4年 小沼 佳南子

この度は特別賞をいただきまして、誠にありがとうございます。私にとって、読書はとても贅沢な時間の使い方のように感じます。読書の仕方・目的に正解を求めるべきではないでしょうし、ただ己が思うままに本を選び、本を読める、そんな自由で豊かな人生をこれからも歩んでいきたいものです。





特別賞（三省堂書店賞）

文学部 文学科1年 小野 愛加

約270万冊もの蔵書数を誇る明治大学図書館の本のうち、たった1冊に光を当てられるのがこの書評コンテストだと私は思っています。『短歌と俳句の五十番勝負』という1冊を通じて、短歌と俳句の魅力に気づいてもらうことができれば幸いです。

特別賞（三省堂書店賞）

文学部 史学地理学科3年 平沢 祐月

この本は、私が授業で教授から紹介されて読んだ本です。私は大学生になってから本を読むことで大きく価値観が変わっていきました。この本は価値観が変わった本の中の一つです。私の書評をきっかけに、この本を読む人が増え、日本が起こした第二次世界大戦について改めて考える機会になれば幸いです。

特別賞（丸善雄松堂賞）

大学院 理工学研究科 博士前期課程1年 石塚 悠斗

この度は素敵な賞を頂き、大変光栄に思います。特に生田図書館のヘビーユーザーとして、日々図書館を運営されている職員の方々に、また大量の貸出・返却と取り寄せでお手間をおかけしている職員の方々に、改めて感謝申し上げます。2024年度までは在籍予定ですので、あと1年、何卒よろしく申し上げます。

佳作

文学部 文学科2年 稲葉 光哉

この度は拙作を佳作に選出していただきありがとうございます。私は『六人の嘘つきな大学生』を読み、本作が少ない情報から他人の人間性を憶測することの愚かさ、危険性を訴える作品であると感じました。有名人を言葉で袋叩きにする「炎上」という現象が社会問題となっている中で、一人でも多くの方が本作を読み、安易に他人を規定することを踏みとどまってくれることを願っています。





佳 作

法学部 法律学科4年 海老原 麻衣

何の本で書くかとても迷いましたが、結局は自分にとって一番大切な本にしました。ずっと本を読むだけで満足していましたが、今回書評という形でアウトプットする機会をいただき、新鮮かつ刺激的な体験となりました。これからも励んで参ります。ありがとうございました。

佳 作

文学部 史学地理学科4年 関 真琴

この度は素敵な機会をありがとうございます。書評は初挑戦でした。「推し、燃ゆ」という作品がより多くの人にとって、何が自分を生かすのかという命題に向き合う契機になれば、という一心で作成致しました。数々の素晴らしい書評の中に、私の未熟な文章がある事を大変光栄に思います。心より感謝申し上げます。

佳 作

農学部 食料環境政策学科1年 木村 幹太

初めての書評の執筆であり、ルール等も良くわからない中から始まりましたが、賞を頂けてありがたいです。「坂の上の雲」は私が初めて読んだ長編小説であるので思い入れがあり、評価をしていただけたことは嬉しいです。

佳 作

政治経済学部 政治学科2年 秋元 瑠名

今回書評コンテストを通じてこの本を知らない人にも、その魅力を伝えられたと思います。私が『滅びの笛』を書評に選んだのは、時代が違っても通じる本の面白さ、教訓を多くの人に味わってほしいと思ったからです。時間がある大学生の今だからこそ、沢山の人が読書の楽しさに気づくきっかけになれば幸いです。



明治大学図書館 第13回書評コンテスト

募集要項

明治大学図書館は、学生の皆さんが読書に一層興味を持ち、図書館を積極的に活用して下さることを目的として、下記の要領で「第13回書評コンテスト」を開催します。どうぞ奮ってご応募ください。

書評とは本の内容を紹介し、論理的に評価・批評をした文章のことです。

このコンテストでは、対象となった本を読みたいという気持ちを喚起する文章を評価します。

- 1 **応募資格** 本学の学生・大学院生
- 2 **書評対象** 明治大学図書館が所蔵する図書
(文学作品・社会思想・科学啓蒙書など、分野・言語は問わない。)
- 3 **応募要領**
 - ① 原稿は Word で作成、A4 サイズに 40 字×35 行で設定し、図書1冊につき、800 以上 1200 字以内かつ1ページ以内を目安とする。
 - ② 書評は日本語で執筆すること。
 - ③ 書評対象図書名、著者名、請求記号(文庫・新書の場合はシリーズ名とシリーズ番号)、出版社、出版年(再版の場合は、初版の出版年を記入すること)、所属、学生番号、氏名を書評作品冒頭に必ず明記すること(これらの事項は字数に不算入)。
 - ④ 文書作成ソフト(Microsoft 社 Word 等)、A4 横書きで作成すること。
 - ⑤ 応募作品は、本人が書いたオリジナル未発表作品であること。
 - ⑥ 応募は 1 人 1 篇とする。
 - ⑦ 応募作品の使用権は明治大学図書館に帰属するものとし、入選作品は、下記の印刷物等に掲載することがある。
『受賞作品集』(図書館作成)小冊子、明治大学図書館ホームページやその他の大学出版物など
 - ⑧ 応募後の連絡はメールで行う。また、応募後、3日以内に事務局から受領確認のメールが届くので確認すること。もし、届いてない場合は必ず事務局へ連絡すること。
- 4 **提出先** review_contest@meiji.ac.jp (書評コンテスト事務局)
- 5 **応募期間** 2023 年 10 月 2 日(月)～10 月 31 日(火)23:59 まで
- 6 **選考** 図書館内で設置した書評コンテスト選考部会で厳正に選考し、表彰作品を決定する。
- 7 **表彰** 賞状及び副賞(副賞は図書カード等。ただし、該当作品が選出されないことがある。)
最優秀賞 1 篇
優秀賞 2 篇
特別賞 4 篇 (紀伊國屋書店賞1、三省堂書店賞2、丸善雄松堂賞1)
佳作 5 篇
- 8 **入選発表** 2023 年 12 月に、図書館内の掲示及び図書館ホームページで発表する。
- 9 **表彰式** 2024 年 1 月下旬～2 月上旬の間に、図書館長・来賓等の臨席のもと、図書館内で行う。(予定)

「書評の書き方講座」をオンラインで公開する予定です。是非、ご覧ください！



2024年2月2日 表彰式

2024年3月発行
編集・発行 明治大学図書館



明治大学図書館
MEIJI UNIVERSITY LIBRARY

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

TEL:03-3296-4254

URL: <http://www.lib.meiji.ac.jp/>

